

目 次

緒 言	i
凡 例	v
序 章 日本語の造語法	1
一 造語のおもしろさ	1
——造語法の世界の広さ・深さ——	
二 人の造語力のたくましさ	4
三 造語法研究のだいじさ	11
前 章 造語法研究の前提	14
第一章 動詞連用形の名詞化	16
第一節 造語法の原点——動詞連用形利用の根源的なはなはだしさ——	16
第二節 動詞連用形利用の生活	21
第三節 む す び	29
第一'章 形容詞語幹の名詞化	31
第二章 「動詞連用形＋動詞連用形」＝名詞	32
第一節 動詞連用形利用の直接発展	32
第二節 生活諸分野別に見られる本題の造語生活	34
一 子どもに関すること	34
二 結 婚	35
三 死 去	36
四 食 物	37
五 衣 類	38

六 住 居	38
七 人と行動	39
八 社会・人事	40
九 職 業	41
十 経 済	42
十一 天 候	42
十二 海	43
第二章 形容詞語幹のはたらくばあい	44
第三章 「名詞＋動詞連用形」＝名詞	47
第一節 名詞を包摂する動詞連用形	47
第二節 「自然造語法」の流布	49
一 「する」動詞のはたらき	49
二 人をあらわすさまざまのことば	52
三 行 動	57
四 生活一般	59
五 諸 生 業	61
六 農 事	62
七 漁 業	64
八 社会生活	64
九 家 庭	65
十 飲 食	66
十一 衣 服	67
十二 住 居	68
十三 身 体	68
十四 児 童	70
十五 婚 姻	71

十六 年中行事	72
十七 天 候	73
十八 環 境	74
十九 動 植 物	75
第三節 幼児語のばあい	76
第四節 む す び	78
第三章 「名詞＋形容詞語幹」＝名詞	80
第三章 第三章のに関連するもの	82
第四章 「動詞連用形＋名詞」＝名詞	84
第一節 名詞を装定する動詞連用形	84
第二節 簡易定着語の世界	85
一 「～モノ」と「～コト」	85
二 「動詞連用形＋名詞＝名詞」の二態二方向	85
三 食 の 語	87
四 住 の 語	88
五 人に関するもの	89
六 しごとに関するもの	90
七 おわりに	91
第四章 「形容詞語幹＋名詞」＝名詞	93
第五章 「名詞＋動詞連用形＋名詞」＝名詞	98
一 この方法の特色	98
二 この方法による生活描写の諸相	99
三 ま と め	102
第五章 「名詞＋形容詞語幹＋名詞」＝名詞	105
第六章 「名詞＋名詞」＝名詞	106
一 はじめに	106

二 単純さの中にこもる意匠	106
三 成語の品位	110
四 さまざまの生活面に実例をひろう	111
五 名詞連結のくふう	118
六 むすび	121
第六章 「副詞＋名詞」＝名詞	123
第七章 「名詞＋助詞＋名詞」＝名詞	125
一 この作法の特性	125
二 生活をえがく簡易法	126
三 助詞を中点とする複合のさま	130
第八章 名詞製作の接辞法	132
一 はじめに	132
二 かぶせの「つけそえことば」－（接頭辞）－で	132
三 あとしめの「つけそえことば」－（接尾辞）－で	138
四 おわりに	148
第九章 名詞製作での単純と複雑	150
一 単純製作	150
二 擬声語・擬態語の単純製作	152
三 わずかの音操作	155
四 転義法のこと	156
五 単純心意の複雑形	157
六 複雑形の「……ズ」形	158
七 「文」相当の複雑形	160
八 長形圧縮	162
第十章 名詞の造語法 むすび	164
第十一章 動詞の造語法	166

第一節 人間と動詞	166
第二節 「～スル」	166
第三節 「～ガル」など——接尾辞のはたらき	172
第四節 「動詞＋動詞」＝動詞	181
第五節 接頭辞の認められるもの	187
第六節 接中辞の認められるもの	197
第七節 「てにをは」利用の複雑形	201
第八節 単純形の製作	211
一 複雑と単純	211
二 名詞をとっての単純形動詞製作	211
三 動詞をとっての単純形動詞製作	215
四 形容詞をとっての単純形動詞製作	217
五 転義法	218
第九節 動詞の造語法 むすび	224
第十二章 形容詞の造語法	226
第一節 約束の世界	226
一 [—ai] の台にのせること	229
二 [—oi] の台にのせること	232
三 [—ei] の台にのせること	232
四 [—ui] の台にのせること	233
五 [—i:] ([—zi:]) の台にのせること	234
六 おわりに	236
第二節 接辞法の利用	237
一 接頭辞の認められるもの	237
二 接尾辞の認められるもの	241
三 接中辞の認められるもの	246

第三節 「てにをは」利用その他の複合形	247
一 「名詞+助詞+単純形容詞」=形容詞	247
二 「名詞+単純形容詞」=形容詞	250
三 「非名詞+単純形容詞」=形容詞	251
第四節 単純形形容詞での転義法	254
第五節 形容詞の地方成立	257
第六節 形容詞の造語法 むすび	259
第十三章 形容動詞の造語法	261
第一節 形容動詞の生成——形容詞との共生	261
第二節 和語形容動詞の製作	262
第三節 漢語形容動詞の製作	265
第四節 形容修飾の世界	269
第十四章 副詞の造語法	272
第一節 副詞修飾の生活	272
第二節 こえうつし（擬声）・すがたうつし（擬態）の副詞	282
一 擬声（擬音）・擬態（擬容）	282
二 擬声副詞	284
三 擬態副詞	286
第三節 承前——「と」「に」などをとるもの——	290
一 「と」をとるもの	290
二 「に」をとるもの	293
三 その他の助詞をとるもの	294
第四節 副詞製作の複合法	295
一 複合法	295
二 「非擬声非擬態要素+助詞」=副詞	295
三 二要素複合（さらにはそれに助詞を加える）	298

四 三要素複合（さらにはそれに助詞を加える）	299
五 接辞を加えたもの	300
第五節 単純形副詞の製作	302
第六節 副詞利用の生活	303
第十五章 爾余の品詞の造語法	304
一 接続詞の製作	304
二 連体詞の製作	305
三 感動詞の形成	306
四 文末詞の製作	308
五 間投詞の製作	311
六 助数詞の創作	313
七 代名詞の製作	313
八 助動詞の製作	313
九 助詞の新作	314
第十六章 複合・省略（品詞製作での複合と省略）	316
一 複合の知恵	316
二 幼児語〜児戯〜の世界	317
——「複合の知恵の一検証」——	
三 複合の文的形成	319
四 俚言句づくり	321
五 省略	322
六 派生	323
七 「複合・省略」考察の二面	324
第十七章 造語の音声美	325
一 はじめに	325
二 母音諧調	325

三 子音諧調	326
四 母音・子音の出現と心意	327
五 音韻体制	330
六 音数律	331
七 ことばの音声美	335
第十八章 造語心意	336
一 「語」にする	336
二 社会意志	336
三 想念の自在さ	337
四 あそび心	338
五 比喩	340
六 直覚直叙	341
七 滑稽感	342
八 批評	342
九 美意識	343
十 むすび	344
第十九章 民間漢語	346
第一節 総説	346
第二節 名詞の民間漢語	348
一 心境・心意をあらわす民間漢語	348
二 人間の精神面をあらわすもの	351
三 人間の肢体に関するもの	354
四 住居およびその中での生活用具に関するもの	355
五 食物に関するもの	356
六 衣服に関するもの	358
七 生業関係のもの	359

八 家庭関係のもの	361
九 子どもに関するもの	363
十 生活一般に関するもの	363
十一 社会に関するもの	366
十二 信仰関係のもの	367
十三 自然に関するもの	368
十四 植物に関するもの	370
十五 動物に関するもの	371
十六 名詞民間漢語での造作法	371
第三節 民間漢語動詞	372
一 精神状況に関するもの	372
二 身体に関するもの	373
三 衣食住に関するもの	374
四 生業に関するもの	375
五 家庭に関するもの	375
六 生活一般に関するもの	376
七 信仰に関するもの	377
八 自然に関するもの	378
第四節 民間漢語形容詞	378
一 精神状況に関するもの	378
二 身体に関するもの	380
三 衣食住に関するもの	380
四 生業に関するもの	380
五 家庭に関するもの	380
六 生活一般に関するもの	381
七 自然に関するもの	382

八 「カ」語尾形容詞	382
第五節 民間漢語形容動詞	383
一 まえおき	383
二 精神状況に関するもの	383
三 身体に関するもの	384
四 衣食住に関するもの	385
五 生業に関するもの	385
六 家庭に関するもの	385
七 生活一般に関するもの	385
第六節 民間漢語副詞	386
一 「時」に関するもの	386
二 「程度」に関するもの	387
三 「分量」に関するもの	388
四 「心情」に関するもの	389
第七節 民間漢語の存立と活動	390
一 民間漢語の力づよい生きざま	390
二 民間漢語の特質	391
三 漢語形成の無限の可能性	391
結 章 造語法研究	393
一 造語法体系	393
二 造語法研究の意義	394
三 造語法の将来	395
あとがき	398
造語法についての諸研究	401
引用（恩借）文献一覧	409
索引（I 事象索引 425 II 事項索引 487）	425

序 章 日本語の造語法

一 造語のおもしろさ——造語法の世界の広さ・深さ——

せんだってのことである。庭先の花を包んでもらって学校に持って行ったら、一人の同僚が目ざとく見つけて、“その花は！”と言った。その人のほしく思っていた花だそうである。名まえは、「モモイロヒルサキツキミソー」（桃色昼咲き月見草）というのであった。長い名である。

私は、すぐに「リュウグーノオトヒメノモトユイノキリハズシ」（竜宮の乙姫の元結いの切りはずし）を思いだした。相手の人に聞いてみると、植物名では、これが最長の名だとのことである。（学名は「アマモ」〈海女藻〉だという。）

人はどうしてこんなに、のんびりと、長い名をつくっているのであろう。「気がしれない。」とも思え、また、「なるほどそういう気なのか。」と、造語者の心理が思われもする。——そこには、なんとも素朴な、美しい生活があろう。

植物の人に、“長い名の植物名があったら教えてください。”とたのんだら、“図鑑を見ればいい。”と答えてくれた。なるほどそうだ。ではあるが、と私は思う。図鑑でしらべたのではおもしろくない。なにかのひょうしに、人がしぜんに口にしているのを聞きたいものだ。そういう時、私どもは、造語者の生活心理を、いっそう端的にうかがうことができるからだ。かの植物の人は、思いついたといったふうで、“「ヒメヒオーギスイセン」（姫檜扇水仙）というのもありますよ。”と教えてくれた。

方言の単語で私が珍重している長名は、「クータラヨシノカゼヒカズ」（食うたらよしのかぜひかず）である。郷里のことばにこれがある。何もしようとはしないで、ただ食ってばかりいるなまけ者のことを言う。男の年輩者たちが、怠惰な若者などを批評してこう言う時、かれらはいかにもしたり顔である。きびしい批評なのではあるが、どこかに明るさを見せている。民間造語のだいじ

第一章 動詞連用形の名詞化

第一節 造語法の原点

——動詞連用形利用の根源的なはなはだしさ——

私どもの言語生活で、日常もっとも多くつかわれる品詞は、名詞と動詞とであろう。造語法の主領域といえ、およそ名詞界・動詞界であろうと思われる。その、名詞・動詞の製作すなわち造語法では、「動詞連用形」が、まさに原本の役わりを演じていると思う。つまりここに、名詞界・動詞界での造語法の原点があると解される。「動詞連用形」がはたらいて諸種の複合形名詞が製作され、また、複合形動詞が製作される。名詞界に限って見ても、複合形名詞——じつは、これがもっとも通常のかたちの名詞であるが——の製作に、動詞連用形が根源的な役わりを演じている。

「目さ(ざ)まし時計」という複合形名詞の生成にはたらいっている有力造語分子は、「さます」という動詞の連用形「さまし」である。——「さまし」がはたらいて「目さ(ざ)まし時計」の形成が成就される。

今日の入学試験用語に、「足きり」というのがある。(かつては、運動競技の一種目の名称にも「足きり」というのがあった。)この種の造語のばあいにも、「切り」という連用形が大きなはたらきをしている。

「足きり」(「名詞+動詞連用形」とはまる反対のつくり、「動詞連用形+名詞」のしくみのものはとらずねて、私は、けさ、しきりに良例を求めた。が、思いつく例は、どれもこれも平凡で、この一例をというものに、なかなか行きあたらなかった。思案しながら朝の洗面にかかって、口中の入れ歯をはずし、これを洗おうとして、“そうだ。「入れ歯」というのがある。”と気づいたしだいだった。

複合動詞のばあいだと、例は、「さがし求める」「思いめぐらす」などをはじ

めとして、「とり出す」「とり落とす」、「とび起きる」「やりぬく」などがある。さらにこの道を進むと、「ひきちぎる」「うち(ぶち→ぶん)殴る」といったぐあいに、特殊な複合動詞が見つかる。「ブンナグル」などになると、「ブン」はもはや接頭辞なみである。

このように、役わりの大きい、利用されることのはなはだしい動詞連用形を、私どもは、特別に注意しないではいられない。名詞界・動詞界での造語法は、ここからとも言ってみたくて、私はここを、「原点」ととなえた。

気づいてみれば、じつに、上の意味での原点を成す動詞連用形そのものが、そのままで名詞化している。おもしろいことである。名詞製作の原本的な手法が、じつに、ここにあるのだ。

古くから、動詞連用形の名詞化したものは、「居体言」と言われている。なるほど、よい名をつけたものだ。動詞連用形が名詞化すると、それは、まさに体言然とし、いかにもすわりのよさを見せている。

「流す」という動詞の連用形は「流し」であるが、これがそのまま、タクシーの走らせかたの名称などになっている。音曲師などの夜分のしごとにも、「流し」と言われてきた。「通う」ということばの連用形は「通い」で、これが、通勤の意につかわれている。思いだったが、私どもの少年時には、小店にものを買うに行くのに、「通い」を持って行ったものである。——(これは、「通い帳」の略称でもあったか。すくなくとも私などは、「通い」というのが本名であると思っていた。おやたちも、ただに「通い」と言いならわしていた。)

「水の出がわるい。」などと言う。「出」は、「出る」の連用形にちがいない。こちらで方言例にはいる。「デー」ということばがある。これを有する方言の地域ではみな、家の座敷ないしおもて座敷をさして「デー」と言っている。柳田先生のお説にもよるのに、「デー」は、本来、「出居」であった。「デイ」が「デー」となったのである。このばあいは、「出る」という動詞と「居る」という動詞との複合態であるが、かまわず言えば、複合態での、動詞連用形の名詞化が